

は　じ　め　に

学校長 入 江 克 己

本校では平成4年度から6年度までは「発達と障害に応じた教育をめざして～コミュニケーションに視点をあてて～」とのテーマのもとに研究を進めてきたが、平成7年度からは新たな基本テーマを設定し、研究と実践を積み上げていくことが確認された。

その基本テーマをどう設定するか模索が続き、ようやく同年の7月を迎えて「『生活を楽しむ子』をめざして一題材の選定と支援の工夫～」を柱に、以後、紆余曲折を経ながら各学部毎に「興味を持ちながらいきいきと活動する子～発達段階と個性を大切にしたい題材の選定と援助の工夫～」(小学部)、「自分なりのめあてを持って、自らの活動を楽しむ子～一人ひとりが主体的に参加し、楽しんで取り組む題材の選定～」(中学部)、「自分の考えを持ち、活動のなかに喜びを見いだす生徒～一人ひとりの思考過程を大切に、活動のなかに喜びが生まれる指導の工夫～」(高等部)というテーマを設定し、ほぼ2年にわたって研究と実践に取り組んできた。

これらのテーマに至る背景には基本的には「今まで、社会的自立をめざして生活する力をつけていくことをめざしてきた」が、「まだ豊かな生活を楽しんでおくとはいえない。……このような実態から、さらに、内面的に楽しむ、楽しみつつ内面から力をだそうとする子を育てていきたい」という本校の願いが込められている。

今日「生きぬく」、「たくましく生きる」という世界観から「生きがいをもって生きる」あるいは「豊かに生きる」という世界観へと質的な転換を見せており、「生きる」とは、単に社会的な環境に適応していく生き方を意味するものではなく、より質の高い、文化的な生活環境づくりとその享受にほかならないとの主張がなされている。

しばしば語られる「社会的自立」とは、生活の主体者として社会的、文化的、そして経済的な諸々の環境に対して身体的、情動的、知的な能力(=学力)をもって統合的・主体(=自己決定)的に働きかけ、相互の交換(=コミュニケーション)の過程を軸に環境世界を拡大・深化させていくこと、言い換えれば自己の身体性の世界を解放することにはほかならない。その意味から本研究は「生活の主体者であるということは、自分の考えや思いを持って自分で活動する(自己活動すること)」であり、「今現在の生活を子どもたちが楽しみながら主体的に送っていくことが、将来の『生活を楽しむ力』を培うことになる」という仮説に基づいている。こうした本校の研究や実践が、今後の障害児教育の研究や実践にいささかなりとも、ある示唆を与えることができれば誠に幸いである。改めて今後とも関係各位のご教示をお願いする次第である。

最後になりましたが、本大会ならびに研究の推進にあたり鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会、鳥取県盲聾養護学校校長会、鳥取県障害児教育研究会、鳥取県東部地区障害児教育研究会、鳥取市小学校教育研究会、鳥取市中学校教育振興会ならびに先輩諸氏、鳥取大学教育学部教官各位から多大のご支援と指導をいただき心よりお礼を申し上げます。